

# 月刊 成子新聞

第11号

令和3年1月



## 法華感話会

話

12月

「とき」

お寒いなかお集りいただきましてありがとうございます。今日は暮れの釜へのお経に伺っている僧侶もおりまして、普段は私を含め十人いる半分の人数でお経を勤めさせていただきました。気づいた方もいらっしゃるでしょうか、今日のお供え物はお寺の前庭になつてある柚子の実です。今朝収穫したものですが、こんなにも鮮やかな色をしていました。昔から冬至には柚子湯でもやけやあかぎれを癒したり、小豆のお粥をいただいて邪気を除くとする風習が伝えられています。

立春、春分、秋分など一年を二十四の季節に分けた二十四節気のなかで、私はこの「冬至」が一番気になるんです。冬至というものは一年の中で一番昼の長さが短くて、夜が一番長い日ですから、翌日からは昼が少しずつ長くなります。つまり、冬至は冬の底のようなもので春への出発点。もう少し頑張れば春が近づいてくるように思えることが私にはうれしいのかなと思います。

### 自然のサイクルと重なる百日の荒行

常圓寺では三十年ほど前から、将来、中山法華経寺の荒行に入ろうという気持ちのある若い僧侶が11月1日からの百日間、朝

の6時に水行をしています。今朝も水行肝文を唱える元気な声が聞こえました。

私はこの荒行も冬至と深いかかわりがあるのではと想像しています。ちょうど朱をつけて「朱夏」、秋は「白秋」、そして冬は「玄冬」というそうです。玄には黒いという意味がありますから、冬は光が少なく暗いということなんでしょう。冬に黒いう字が当てられていることで、青い春が引き立つているようにも思います。

我々がお日様からいたぐ工エネルギーの量は冬至まではだんだんだんだん少なくなり、冬至を過ぎるとだんだん増えていくわけです。今年は新型コロナウイルスのために荒行が中止になりましたが、行われていれば今ぐらいのころが肉体的にも精神的にも最もきつい時期ではないでしょうか。荒行に入る前に体が蓄えていたエネルギーは、すべて使い果たされて空っぽ。その肉体的な飢えというのを百日間続いていくのではと想像しています。

立春、春分、秋分など一年を二十四の季節に分けた二十四節気のなかで、私はこの「冬至」が一番気になるんです。冬至というのは一年の中で一番昼の長さが短くて、夜が一番長い日ですから、翌日からは昼が少しずつ長くなります。つまり、冬至は冬の底のようなもので春への出発点。もう少し頑張れば春が近づいてくるように思えることが私にはうれしいのかなと思います。

### クリスマスと「冬至」

冬至の数日後にあるクリスマス。このクリスマスは北欧地方の冬至を祝うお祭りが始まっています。北欧の冬は長く、日照時間は限られています。それ故に太陽の光に対しての感謝の念は常夏の土地に暮らす人に比べてはるかに深いはずです。

「この一年、日が短くなるまで皆さんよく働きました。これからは温かい方に向かっていきますから、仕切り直してまた頑張つていきましょう」と。そんな思いが人々の

お祭りにこめられたのではないでしようか。

### 年末に思い出す朱子の言葉

話は変わりますが、中国では季節を色々表します。春には青をつけて「青春」、夏には朱をつけて「朱夏」、秋は「白秋」、そして冬は「玄冬」というそうです。玄には黒いという意味がありますから、冬は光が少なく暗いということなんでしょう。冬に黒いう字が当てられていることで、青い春が引き立つているようにも思います。

中国に「朱子」という儒学者がいます。朱子学の創始者です。年末になるといつも思い出す朱子の句です。

### 少年老い易く学成り難し

一寸の光陰軽んずべからず  
いまだ覚めず池塘春草の夢

階前の梧葉すでに秋声  
「時はあつという間に過ぎ去つていくの

### 「もしかしてコロナ?」

先月のこの会で、産経新聞朝刊の一面に出ていたエッセーから、卒寿を迎えた男性が86歳の奥さんを介護しているという話を紹介しました。毎度ですが今回も同じ欄に掲載されていた、小金井に住む91歳のおばあちゃんが書いた話を紹介したいと思います。(左枠参照)



雪を頂く日も近い山並みを望む院庭に到着。防護服の息子が目に入り、体の力が抜け、PCR検査、採血と点滴もあります。たく「俎上の魚」となった。

どれ位の時が過ぎたろうか。「よかつたですね、コロナじゃなくて」。天使の晴れやかな声。

車いすは飛ぶように病室に向かい尿路感染症と診断され深い眠りに入る。

翌晩、息子が花火を見ようと誘いにきた。院庭でのコロナ撲滅祈願花火だ。夜空中に弾け散る花々のエネルギーの美しさ、轟き渡るひびきに、私は母の励ましをしっかりとった。点滴をお供に、還暦の息子に支えられて見た花火は90代のエールとなつた。これからもまわりのすべてに感謝して生き抜きたい。私が元気なうちにコロナ禍がおさまりますように。

(産経新聞

昨日11月30日「朝晴れエッセー」より)

今、身につまされるお話をよね。「熱が出ちゃった」「のどが痛い」「ひょっとしたら」、誰もがこういう心配の中に身を置いています。まして91歳。高齢の人ほど気を付けましょうということは耳が痛くなるほど言われていることで、よもやと暗い気持ちでベッドにいるのがよくわかります。幸いこの方は恵まれた環境にあって、近くにいる娘さんから始終、安否確認の電話が来る。男の孫さんもいるようで車を運転してくれる。おまけに息子さんはお医者様ですから、救いの手がすっと伸びた。なつかつPCR検査も問題なかつた。花火まで見せていただきて何よりであつたわけですが、やはりそれでも「周りに感謝して頑張つて生きていこう」「この災いが早くおさまりますように」とそんなことを思つています。感謝の中に最後までしつかり生きるぞという気持ちを感じる文章です。

### 「とき」を正しく理解する

先月紹介した寺田寅彦さんの言葉を覚えていましたか？

モノを怖がらなさすぎたり、怖がりすぎたりすぎるのは易しいが、

本当に怖がることはなかなか難しい

今の我々にとつて大事な言葉だと思い、頭のどこかに置いて帰つてくださいとお願いしました。

この寺田さんの言葉にある「モノ」を、先ほどの朱子の「一寸の光陰軽んずべからず」の教えで述べた「時間」に置き換えてみると、わかりやすいかもしれません。

時間を怖がらなさすぎたり、怖がりすぎたりすぎるのは易しいが、

本当に怖がることはなかなか難しい

たとえば「池塘春草の夢」。池の淵で気持ちよく夢見心地になつてゐるのは、厳しい

言い方をすれば現実を見ていないということです。時は刻一刻と過ぎてることを忘れてしまつて、要するに時を怖がつてない状態です。

そして「階前の梧葉すでに秋声」は、階段の前の桐の葉が色づいていて「ああ困つた、気づいたら冬が来ちゃつて」ところは逆に怖がりすぎている状態とも言えます。

当たり前すぎるのですが、一日24時間これだけは誰もが平等です。「○○さんはまだじめだから1時間多い」「○○さんは不まじめだから1時間少ない」。それは絶対にありません。どんな人にも24時間、365日。これを本当に正しく理解できているか

というと、理解できていないから時間を無駄にしてしまう。それが怖がらなさすぎたりといふことです。時間といういのは怖いもの、平等であるが無駄に過ごしやすいもの、そういう風に受け止めることができないでしようか。

時間についてはいろんな人が同じことを言つています。「時は金なり」もそうですし、日蓮聖人は「先ず臨終の事を習うて後に他事を習うべし」とおつしやいました。」時といふのは止まつてしまふときがくることをよく弁えて大事に使つてください“ということです。これは私が自分自身に一番言い聞かせていることであり、常に我々が心になければならないことだと思つています。

11月、12月とこうして無事に感話会を開かせていただきことができました。今年は本堂の工事に携わりましたが、順調に進んでおりますのも皆さんのおかげです。今年度中におおよその事業を完結させていきましたと思つておりますので引き続きのご協力を願いたいと願っています。

## 仏さまと草花

### 第1回 シキミ

年末、年始もたまに歩くようにしていましたが、紹介できるようなコースを歩く機会がありました。そこで「万歩百景」のピンチヒッターに新しいコーナーを考えてみました。仏教と蓮の花、法華経を唱える私たちと蓮の花は深く結ばれていますが、仏教的習慣やお経の中には他にも多くの草花が出てきます。この新コーナーではそんな草花にまつわる話を紹介します。参考図書は『なぜ仏像はバスの花の上に座っているのか』(稻垣栄洋著・幻冬社新書)です。



常圓寺ではシキミを販売していますが、シキミを墓前に供えると知る人は少なくなりました。花を備えるのが普通になつたからです。同じようにお墓にシキミを植える方もいなくなりました。シキミは別名「仏前草」ともいわれ、古来より死者を惡靈から守る植物と言い伝えられてきました。事実、シキミはアニサチンという強い毒性物質を持っています。

火葬が習慣化する以前の土葬の時代では埋葬した亡骸を鳥や獸から守る必要がありました。そのため毒性をもつシキミが植えられたのです。また、常緑樹であるシキミは枯れにくくもあり、常に墓前を清々しく保つ上でも重宝だったのかもしれません。

時代が変わる中で習慣も変化していくのは止めようもありませんが、変わりゆくものの由来だけでも知つておくのは大切なことではないでしょうか。

のが正月行事の主眼ですから神事にまつわるサカキが正月飾りの源流であるのは真つ当なことなのでしょう。